

南米の旅 2020



2020年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

日本から見たら地球のほぼ裏側の南アメリカ（南米）に行ってきた。訪れたのはクスコ、ナスカの地上絵、マチュピチュ、イグアスの滝など南米の一部であるが、インカ文明の歴史と壮大なスケールの自然に感動した旅になった。

第一章 プロローグ (Prologue)

■ ツアー客は5人

2020年2月、世界中で新型コロナウイルスが広まり始めた影響でキャンセルが相次いだ結果だろうか、今回の南米へのパッケージ・ツアーの参加者は私たち夫婦を含めて5人という少数精鋭メンバーだ。

ツアー客の残りの3人は、私と同世代の坂田さん夫妻、一人参加の野口さんは30代くらいで背の高い好青年だ。この時期に南米に行くことからして海外旅行慣れした面々である。

そして添乗員はおそらく30代で、キュートなしっかり者という印象の女性である。

私にとってこんな少人数のツアーは初めてで、添乗員に聞くと「私も海外ツアーで5人というのは初めてです」と返ってきた。

親戚縁者を何人か集めて旅行に出たという感じで、これは面白い旅になりそうな予感がしてくる。

■ 南米の歩み

南米に行くにあたり、私なりに南米の歩み、歴史を調べてみた。

まず人類の歴史から始まる。700万年前にアフリカに誕生した人類がその後、世界各地に拡散していった途方もなく壮大な旅、その旅を「グレートジャーニー」と、ある考古学者が名付けた。

私はそれについて書かれた本を読んだことがある。簡単にいうとアフリカで生まれた人類がヨーロッパやアジア、そしてアリューシャン列島を経由して北米大陸、南米大陸に到達した。人類はそれらの各地域で生き抜くために肌の色や瞳の色が変わり、鼻の高さや体型も変化していった。その意味では南米に到達した人類は進化の最終系かもしれない。

南米大陸ではアンデス山脈の高地に人々が暮らし始め、この条件で生き抜くため彼らの身体は低身長化、頑健化していった。空気が薄いので肺活量が大きくなり、血液の量は他の地域の人間より多くなっていった。

紀元前数世紀にはチチカカ湖のティワナク、地上絵で有名なナスカなどに文明が点在し、これらの総称をアンデス文明と呼び、12世紀頃にクスコ王国が成立し、最終的にはインカ帝国として拡大していった。最盛期のインカ帝国はコロンビアからアルゼンチンにまで南米大陸の東側一帯、人口は1600万人にもなった。

一方、コロンブスの新大陸到達の2年後の1494年に、大航海時代の両雄であるスペインとポルトガルの間でトルデシリャス条約というとんでもない条約が結ばれた。この条約は西経46度37分で新世界を分けて西側をスペイン、東側をポルトガルに属すると定めた。

これによってスペインによる南米大陸西側の征服行為がある意味正当化されて、インカ帝国はスペインに征服されることになった。

現在使われている言葉からも容易に想像できるが、ブラジルがポルトガル領、その他の南米大陸は全てスペイン領になった。

19世紀になってからそれら各地域は次々に独立してほぼ現在の姿に至っている。

日本との関りは19世紀末からで、ブラジルやペルーへの移民により関係が深まった。

そして現在、南米に最も影響を持つ国はアメリカ合衆国（米国）であるのは言うまでもない。だから各地で米ドルが使用できる。

■JALに驚く

私たちは日本からニューヨーク経由で南米ペルーに飛ぶ。ニューヨークまでは日本航空（JAL）を利用する。それは私にとっては久しぶりのJALの旅になる。

最近の安い海外ツアーでは費用を抑えるためか外国の航空会社が多く使われる。私にしても何年前かにハワイ島に個人旅行で行った時以来のJALの利用である。

今回のJAL便は24時間前にWEBチェックインができるというので長時間フライトにも疲れないう前方にスペースがある座席を前日にインターネットで予約していた。従って非常口の直ぐ近くで目の前には客室乗務員（CA）が座るスペースがある。

特別仕様の席なのでテレビやテーブルを確認しているとCAがやって来て、彼女は自分の名札を指差して「〇〇と申します、何かお困り事があれば申し付け下さい」と挨拶をしてきた。これは何だか様子が違うと思いつつも、個人的に挨拶されて悪い気はしない。

「ここは非常時に脱出のお手伝いをお願いしますが、よろしいでしょうか？」と聞いてくる。

ああ、そういうことかと少し気を取り直して「もちろん、大丈夫ですよ」と答え、そして今度は「ここに座る方ですか」と前の CA 座席を指して私から彼女に聞く。

「いいえ、私はここには座りませんが、このエリアをお世話させていただきます」と答えてくれる。その申し訳なさそうところが何とも言えない。

飲み物のサービスが始まりビールを頼むと、「銘柄はいかがいたしますか？」と聞かれる。アサヒ、麒麟、サントリー、そしてエビスがあるという。

私は迷わず「もちろん、エビスです！」と頼む。

彼女はにっこり笑いながら「そうですよね、承知しました」と答える。何か安心する。

機内食はメインの料理以外にサラダ、煮物、日本ソバが各々3つの入れ物に入って出てくる。さらにスプーン、フォーク、ナイフは金属製で、もちろん割り箸も付いている。

そして「味噌汁はいかがですか？」と別の CA が後からやってくる。

食べ始めると、「少し融けてからお召し上がり下さい」とカップ入りの凍ったアイスクリームが配られる。私が好きな有名ブランドのハーゲンダッツだ。

トイレに入ると、何と便座にウォッシュレットが付いている。飛行機内のトイレでは初めて見る。「ここまでやるのか」とトイレで思わず小さな声をだしてしまう。

着陸の時に私たちの目の前に座っている少し年配の CA が話かけてきた。

「ニューヨークにお住いですか？」と聞いてくる。そんな風に見えるのかと驚くが、そう聞かれてこれもまた悪い気はしない。さすがベテラン CA はつかみがうまい。

着陸前のしばらくの間、彼女と話をする。他愛もない話から JAL が大きく変わって驚いていることを伝えると、彼女は「どうしたら次も JAL に乗って頂けるかと考えて仕事をするようになりました。昔はそんなことは考えませんでした、会社が傾いてから社員の意識が根底から変わり、その意識改革の結果が徐々に見えてきました。」と答える。

組織も個人もどん底を経験すると強くなる。

■地球の裏側

ペルーの首都リマに到着する。JAL のフライトが 13 時間、ニューヨークでの乗り継ぎ時間が 4 時間、そして南米の航空会社ラタムに乗り換えて 8 時間。合計約 25 時間も要したとは、さすがに地球の裏側に来る時間は半端でない。

日本を出たのは夜だったが、地球の裏側なので昼夜逆転しており 25 時間後のペルーの現在時刻は朝 7 時だ。



空港に現地のガイドが迎えに来ている。これから1日が始まる朝なので休む間もなくバスに乗って市内観光に向かう。バスはさすがに大型バスではないが30人くらい乗れる中型バスで、ガイドを加えて7人だけという光景に少し笑ってしまう。

この旅は体力勝負になる予感がするが、とにかくバスの中はゆっくり出来そうだ。

第二章 リマ (Lima)

■リマ事情

バスの中は長旅で疲れている我々を気遣いながらも、出迎えてくれた一番元気な現地ガイドがペルーやリマの現地事情を話してくれる。ガイドはリマ在住の日本人だ。

ペルーの人口は約3000万人、首都のリマは1000万人超で完全に一極集中している。その大きな理由は、海そして過ごしやすい気候にあるという。

降り立ったリマ国際空港は南緯12度ということで驚くほど赤道に近い。北半球で12度というとフィリピン辺りだが、フィリピンのように暑くもなくカラッとしていて心地よい。

2月の南半球は夏、現在の気温は29℃、日が射すと暑い日陰は涼しい。冬になっても最低気温は16℃位までしか下がらないというから、ハワイのような気候で街路樹には一年中色々な花が咲いている。

この気候は海流の影響だという。寒流のペルー海流が南米大陸の西側の沖を南極から赤道に向かって流れており赤道近くでも海水温が低いので暑くならず過ごしやすい。

この低い海水温がたまに高くなることがあり、この現象を“エルニーニョ”と呼んでいて日本でも有名だ。地球の裏側の海水温が日本の気象に大きな影響を与えるから決して他人事と思っはいけない。人や食べ物も影響しあっていることを今回の旅で感じる事になる。

世界遺産の旧市街地を案内してもらおう。その中心はアルマス広場で、周辺には日系人のフ



ジモリ大統領も住んでいた大統領官邸、カテドラル（大聖堂）がある。カテドラルはインカ帝国を征服したスペイン人「フランシスコ・ピサロ」が礎石を置いたというペルー最古のものだ。

リマは海辺の街なので海洋国スペインが建都した。しかしその資金はいうまでもなくインカ帝国から没収した財宝である。

征服者フランシスコ・ピサロは侵略者のはずだが、ペルーの人々は彼のことをどう思っているのだろうか。私の素朴な疑問をガイドにぶつけてみた。

ガイドはこう説明する。

ピサロはスペインではもちろん英雄で、ペルーでも英雄に近い存在だという。その理由はスペイン語やキリスト教などスペイン文化が完全に定着し、ある意味現在のペルーはスペイン人がもたらしてくれたという解釈をしているという。

私は驚きながらも何となく理解した。ペルー人には過去にこだわらないで現在を受け入れる寛容の心があるのだろう。だから南米では飛行機や列車が遅れて待たされても、決して腹を立ててはいけなと、それが南米スタイルだとガイドは何度も言っている。

■情熱の国

新市街のミラフローレスの海岸沿いの高台に「恋人たちの公園」がある。

公園の真ん中には大きさ 20m くらいの刺激的なコンクリート像がある。白昼堂々と、いや像だから夜も昼もないが、男女が抱き合いながら濃厚なキスを交わしている。日本ならば PTA や教育委員会がハレンチだとかいってとても認められないだろうが、さすがにペルーは違う。



しかしこれはペルーというよりもスペインかもしれない。なぜならば公園のベンチを見るとスペインの有名な建築家ガウディが設計したバルセロナのグエル公園に酷似している。

情熱の国スペインの文化がペルーに入ってきて、ペルーの人々もそれを受け入れたようだ。しかし私はスペインでもこんな像は見たことがないから、本家を追い越したかもしれない。

私は小声で「御見それしました」と言い、公園を後にした。

■ペルー料理

昼食に案内されたレストランではペルー料理の数々が出てくる。

まずは「インカコーラ」、コーラといって色は黄色で味もあの薬のようなコーラ独特のものではなく単に少し甘い炭酸ジュースになっており飲みやすい。国民的人気のある飲料だというから味もさることながらネーミングのおかげかもしれない。

「チチャモラーダ」という紫色のトウモロコシから作ったジュースがある。一見すると赤ワインだが、味はブルーベリーのジュースに似ている。

「ポジョ・ア・ラ・ブラサ」はガイドお勧めの料理で、鶏肉の炭火焼きとでもいうペルーの人気料理だ。炭火の香ばしさと塩加減が絶妙で日本人の口にも合う。それもそのはず、これを小さく切って串に刺したら焼鳥だ。だから味は容易に理解できるだろう。

「ルクマ」という果物のアイスクリーム、これもうまい。色は赤い果肉のメロンのようなが味は栗に似ている。

ペルーにはアジアや欧米では経験したことのない面白い料理や飲み物がたくさんある。そして嬉しいことにどれも日本人の口に合う。



(左から、インカコーラ、サラダとチチャモラーダ、ポジョ・ア・ラ・ブラサ)

夕食のレストランではペルー名物の酒「ピスコ・サワー」を注文する。「ピスコ」という42度のブドウの蒸留酒をベースに卵白に甘味を加え炭酸割りしたカクテルで飲みやすい。

メイン料理はペルー風肉ジャガとでもいうもので牛肉、人参を醤油ベースの汁で煮込んだものに大きなジャガイモとライスが添えてある。トッピングに「チョコクロ」という大粒のトウモロコシとグリーンピースがかかっている。このチョコクロのもちもちの食感がたまらない。

味も日本人好みに仕上がっている。これから始まる旅でペルー料理は私たちの舌を存分に堪能させてくれそうだ。



(左からピスコ・サワー、ピスコ、チョコクロの乗ったジャガイモ料理)

■ポテト

ペルー料理の特徴は何といっても食材だろう、種類が豊富で色や形が珍しいものもたくさんある。日本でも馴染みのあるジャガイモ、サツマイモ、そしてトマトも、どれもアンデスで栽培されていてインカ帝国が征服されてから南米からヨーロッパに渡り、世界中に広まり日本にも江戸時代に入ってきた。いわば植物版のグレートジャーニーだ。

中でもジャガイモは日本で品種改良されたインカのめざめ、アンデスレッドなどが有名だが、これはいかにもペルーが原産だということを物語っている。

そしてジャガイモの語源が面白い。インドネシアのジャカルタから日本に入ってきたので「ジャカルタから来た芋」から「ジャガタライモ」、そしてジャガイモになった。

ついでにサツマイモは当たり前のように鹿児島だが、カライモ（唐芋）とも呼ばれるので中国経由で入ってきた。原産はメキシコだが、紀元前からペルーで栽培されていた。

ジャガイモはナス科、サツマイモはヒルガオ科なので別々の植物だが、英語でジャガイモはポテト (potato)、サツマイモはスイートポテト (sweet potato) と呼ばれており、ジャガイモの一品種としてサツマイモがあるというのが国際的な概念らしい。

バスの中でガイドがクイズを出してきた。ポテトの品種は全世界でどのくらいあるのか？ 皆は 30 とか 100 とか言っているが、正解は桁違いの約 7000 だという。その数に一同驚きの声をあげる。

ガイドは、その情報の入手先はリマにある国際ポテトセンターだという。

ホームページを覗いて見ると、「国際ポテトセンターは、アンデスの芋類の研究機関として 1971 年設立された。手頃で栄養価の高い食品により貧困の削減、ビジネスへ対応に科学的ソリューションを提供する。リマを本部に世界 20 カ国で研究している」と書かれている。

ジャガイモもサツマイモも紀元前の大昔からアンデスの高地で栽培されていた。先祖代々受け継いできたものを世界に広め、そして今度はその力で食料難の救済から世界貢献までしようとしている。たかが芋、されど芋だ。

第三章 ナスカ (Nazca)

■ 3 日 3 晩の話

私たちを案内してくれているガイドは日本生まれの普通の日本人で、ここに永住している。

何でも質問してくださいという彼の言葉をそのまま受け取り、観光の質問ではなく個人的な質問を試みた。「どうゆう理由でペルーに住むようになったのですか？」とバスの中で皆に聞こえるように聞くと、彼はマイクを使って話し始める。

彼は話せば長くなり 3 日 3 晩かかると言いつつ、話したくないというのではなくどちらかと言えばその質問を待っていましたとばかりに話始める。

彼は若い時に自転車で世界一周旅行をしていた。南米を訪れしばらく滞在したら、南米の魅力に取りつかれて離れられなくなり 2~3 年後に永住を決意した。

それから 30 年、山あり谷ありで苦勞も多かったという。その 30 年間を語るのに 3 日 3 晩かかるらしい。

彼はペルーだけでなくブラジルやボリビアなど南米全体の自然や気候、人々を好きになったという。今置かれた状況を受け入れるというあの寛容な氣質を好きになったのだろう。

その中でペルーを選んだ理由はやはりインカだと、インカ文明は実に面白く興味が尽きないと彼は楽しそうに話してくれる。

■ パンアメリカン・ハイウェイ

ナスカの地上絵を見に行くために私たちを乗せたバスはパンアメリカン・ハイウェイを南下している。真っ直ぐで快適な道なので裕福な人たちは伴走車を従えサイクリングを楽しんでいる。

この道はアラスカからアルゼンチン南端までの約 4 万 8000km という途方もない距離を主に太平洋沿いの都市を結ぶように建設されたものだ。赤道の総延長が約 4 万 km なので地球一周よりも長い。苦勞して山を切り開き、砂漠に道路を通したのだろう。



都市部から少し離れた郊外の山の斜面に質素な家がたくさんある。ガイドの話では不法に建てた家で勝手に住んでいるという。

その手口は、最初はワラを用い素早く家を建てる。その後は住みやすくするために木材を使い木の家にし、最終的には頑丈なレンガの家にするという。まるで 3 匹の子豚のようだと笑いながら話すが、そのくらいこの国では貧困が深刻だ。

そんな中でもこの国の人々は自分の貧困の現状を受け入れる。受け入れてもそのまま過ごすことなく家をグレードアップしていくたくましさがある。

残念ながら今の日本人にはこのたくましさはないだろう。そもそも現状を受け入れないから自分の不幸を政府や他人のせいにして、その先の自助努力もしない。

砂漠の中をハイウェイが貫いている。左は山がそびえ、右に太平洋が時々見える。この辺り一帯が砂漠化している理由は寒流のペルー海流だとガイドが説明してくれる。

海水温が低いので霧は頻繁に発生するが、上昇気流がなく雲ができない。そのために雨が降らないという。分かったような分からない話である。

その霧が出てきた。霧の出現は波状的で現れては消えていく。

砂漠に霧、そしてハイウェイという組み合わせはここでしか経験できないかもしれない。

霧の次は多くの養鶏場が現れてくる。その規模は日本の数十倍もあるだろう。

その理由をガイドが説明してくれる。

移民してきた日本人はコツコツと金を貯めて土地を買った。しかし言葉の壁もあり砂漠の安い土地を詐欺同然で買わされた。困り果てるが諦めずに試行錯誤し、あることに気が付く。この砂漠地帯は木や草など緑がないので鳥の餌になるものがなく、渡り鳥が飛来しない。そのために鳥インフルエンザが発生しないので養鶏場に適している。

そこに当時の日本人の根性や忍耐力が生きてくる。養鶏という仕事は朝から晩まで一年中365日休まずに鶏の世話をしないとイケない。そういう地道で根気を要する仕事はペルー人には向いていないが、当時の日本人には向いていた。いや、やるしかなかったのだろう。

ここに養鶏場を作って成功した日本人が一人出れば、あとは日本人のコミュニティで広まり今や何人も地元の名士になっているという。最初は騙されたかもしれないがその後は地域に馴染んで養鶏という産業を立ち上げて地域貢献をしている。

昨日食べた鶏肉はここからきたのかも知れない。



■飛行機酔い防止策

ナスカはリマから南に440km離れており、ナスカに行っても上空から見なければ地上絵の全体が見えない。そのために地上絵観光は小型飛行機による遊覧飛行が主体で、私たちはピスコという海辺の小さな街の飛行場に着いた。田舎街には不釣り合いな立派な飛行場だ。

まだ新しいので、地上絵ビジネスは儲かると思って最近投資したようだ。

途中のバスの中ではガイドが飛行機酔いの防止方法を講釈してくれた。

飛行機の座席は中央の通路を挟んで右と左に12席あり、どちら側の席に座っても地上絵が見られるようにパイロットは急旋回を繰り返す。その時に若い女性が「キャー」と悲鳴をあげるとパイロットも男の性（さが）でさらに頑張って急降下や急旋回を繰り返す。だから悲鳴はあげない方がいいという。果たしてこのアドバイスは効くのだろうか。

空港でチェックインして、まずは体重計に乗る。小型飛行機なのでバランスをとるために乗客の体重によって座る席が決められる。

席も決まって搭乗ゲートの入り口で1時間ほど待っていると、私たちの前の飛行機に乗る乗客たちが搭乗しようとして一旦はゲートを出るが引き返してきた。

飛行機の整備に時間がかかっているようだ。私の隣で見ていた坂田さんが「飛行機内のマットを交換している」とポツリと言い、さらに「飛行機酔いで機内を汚したらしい」と付け加えた。

その言葉により待っている乗客たちに緊張感が走る。そんなに遊覧飛行は過酷なのか。

坂田さんは「若い女性がたくさん悲鳴をあげたのだろう」と言い、さらに「大丈夫、我々の中に若い女性はいないから」と的確な情勢判断を下している。



■謎だらけの地上絵

そもそもナスカの地上絵とは何なのだ。これもガイドが詳しく教えてくれる。

大きき百メートル前後の巨大な絵は幅約 1m、深さ約 30cm の溝で出来ており、明るい色の岩石を露出させることによって描かれている。一筆書きで描かれていることも特徴だ。

絵は紀元前から 8 世紀頃までの約 1000 年間で描かれた。雨がほとんど降らない気候環境なので、雨による浸食がなく長期間保持されている。

1939 年に上空を飛行機で飛んでいた考古学者が地上絵を偶然発見した。その後研究を引き継いだ数学者マリア女史が終生この地に住み、観測塔を作り解明作業と保護を行った。

研究に生涯をささげた彼女にしても解明まで至っておらず、彼女の仮説は夏至や冬至にこんな動物や植物がでてくるというカレンダー説だ。しかしこの説に真向うから異を唱えたのは有名なホーキンス博士で大いなる論争になったが、決着には至らなかった。その他にも諸説あるが、未だに有力説がなく全く謎だらけだ。

そのためか、描いたのは宇宙人だとガイドは真顔で言っている。

ナスカの地上絵は 1994 年に「ナスカとフマナ平原の地上絵」として世界遺産に登録されたが、2016 年に名称が「ナスカとパルパの地上絵」に変更された。それはパルパという場所にも地上絵が発見されたからだ。そのパルカの地上絵はナスカよりも古い。

南米にはまだまだ我々の知らない世界が残っている。

■遊覧飛行

小型飛行機が離陸すると街並みの向こうに海、その向こうに半島が見える。反対側は砂漠、彼方に山が連なる。飛行機は山の方向に進路をとる。木がない岩と砂の山、時々干からびた川の跡が見える。

この景色を眺めているだけで飛行機に乗った甲斐がある。私の旅はここしばらくヨーロッパの城や教会巡りが多かったためか自然の壮大さに感激するのは久しい。やはり南米に来て良かったと大空を飛びながら思う。



離陸後 40 分で地上絵の上空にやって来る。いよいよ地上絵との対面になる。

最初の対面はクジラ、そしてクモも確認できる。飛行機のパイロットがつかない日本語で「右、サル」とか「左、ハチドリ」とか説明してくれる。

それでも予想どおり絵は小さく、分かり難い。

予想どおりというのは、飛行高度が高いため小さくしか見えないとガイドから事前に聞いており、過度な期待をしないでいた。テレビなどの紹介映像は特別に低空飛行で飛ぶので大きく見えるという。

写真を撮りまくるが、線のコントラストが低くあまり期待できないだろう。

私はグーグルアース (Google Earth) を使い始めた頃にナスカの地上絵を何度も見ていた。

グーグルアースはインターネット版の地球儀とでもいうもので、世界中の衛星写真をまるで地球儀を回しているかのように見ることができる。本物の地球儀との違いは解像度で、例えば自分の住んでいる街、住んでいる家、自動車まで判別できる。これを利用して私は世界各地、日本各地の旅を疑似体験していた。もちろん今でも見ることができるので、帰ったら久しぶりに見てみたい。

そして今、パソコンの画面で見ていた地上絵の本物が眼下に出現する。小さくて多少見えにくくても、それを含めて本物なのだ。

車のタイヤ跡がたくさんある。ひどいのはパンアメリカン・ハイウェイが真ん中を貫いているので、トカゲの地上絵の尻尾がハイウェイで切られている。トカゲの尻尾切りとは偶然にしても笑えない。



私が想像するには、最初に宇宙人たちは宇宙船の離着陸や宇宙との交信のために三角形や四角形、直線などの幾何学図形を描いた。その後には絵心と遊び心のある宇宙人が地球の動物などを落書きした。落書きだから数が少なく小さい。

やはり実際に本物を見ると全く違う発想が生まれる。昔から言われる“答えは現場にある”というやつだろう。

川のような模様は宇宙人が去った後、ある時期に川ができその後に干からびたものだろう。

■防止策の効果

席が離れていて様子が分からなかったが飛行機が着陸して駆け降りるように妻がトイレに向かった。飛行機酔いをしたらしい。顔も真っ青でつらそうな顔付きが気になる。それでも飛行機のマットを取り替えることにはならなかったようだ。

それにしても悲鳴は全く聞かれなかったので、ガイドの飛行機酔い防止策は完璧に実施されたはずだ。それなのに・・・だ。やはり乗り物酔いの薬を持参すべきだった。

海岸沿いの高級リゾートホテルのレストランに案内される。日曜日のリゾート地はリマの裕福な家族連れで賑わっている。来る時に見た3匹の子豚の家に住む人々とは対照的だが、それは国が発展している証だ。資本主義経済の発展とは貧富の差を生むが、その差が拡大しつつも国全体が徐々に豊かになっていく。本当に貧困な国には誰一人裕福な人はいない。

食事はペルー海岸地方の料理「セビーチェ」、白身魚のマリネにあの大粒のトウモロコシのチョコロも付いている。飛行機酔いの妻の体調も回復したようで、美味しそうに食べている。



■移民

話好きなガイドから移民についての話を聞く。

1899年にペルーへの第1回移民船が出航した。移民という言葉には開拓者家族とか比較的良いイメージがあるが、実態は出稼ぎである。農家の次男三男などの独身の若者ばかりで、第1回は新潟出身者が多かったという。その理由はその年の新潟の米作りが凶作で、そのため農家の長男も混じっていた。

月給は127円、当時の日本の警官や教員の月給が10円くらいなので相当高かった。ところが疫病で半分以上が死んだというから、命がけの仕事でしかも苦難の連続だったという。

現在のペルー在住の日系人は約10万人、その7割の出身地は沖縄、そして九州や東北が多い。この偏りは日本で発生した自然災害に関係しており、災害で食べていけずに出稼ぎに出るという事情からだ。

最近、沖縄からの移民の記念式典が開催され、その通訳のためにガイドが手伝った。式典出席のために日本から来た沖縄県民が驚いたことは、今では使われていない古い沖縄方言がペルーでは普通に使われているということだった。進化が止まり昔の沖縄が残っている。

方言だけではなく、和の心、気遣い、忍耐などといった日本人の気質も日系人の若者に残っているともいう。彼らはペルー生まれペルー育ちでスペイン語しか話せないが、話をするとそう感じる部分が多いという。

その若者たちは日本の良きところを保ちながらもペルー人になっていく。何百年もすれば地球人は一つの民族になるかもしれない。

そうするとまた宇宙人がこの星はどう変わったのかとやって来るかもしれない。それまであの地上絵は残しておかなければならない。

第四章 クスコ (Cusco)

■標高 3400m

インカ帝国の首都だったクスコという街の名は誰でもが何となく聞いたことがあると思う。私にとっては「兼高かおる世界の旅」という番組で彼女がこのクスコを素晴らしい街だと紹介していたから覚えている。

実は今回の旅に出る前に私の旅仲間から昨年亡くなった兼高かおるお別れの会への出席に誘われていたが、この南米旅行のために丁寧にお断りしていた。

これも何かの縁、兼高かおるを偲んでクスコを歩くことにしよう。

リマからクスコへは約600km、飛行機で1時間半かかる。バスもあるが22時間も昼夜乗り続けるのでとても過酷だ。しかし場合によっては飛行機の方が辛いかもしれない。

理由は標高差で、リマは海辺の街なので標高 0m に近いが、クスコは標高 3400m もあり、とんでもなく高い。富士山でいえば 9 合目くらいで、その標高差に一瞬のうちに順応しないとイケない。

クスコに降り立つと相当に寒い。100m 上昇すると気温は 0.6°C 下がるので、ざっと計算するとリマよりも 20°C も低い。実際の温度も 6°C ということで計算は当たっている。

私はダウン・ジャケットを着込み空港を出る。

街には街路樹があり、緑の山々が連なっている。高地なので過酷な自然環境かと思っていたが、実際には緑が多い。決して荒涼とした富士山 9 合目を想像してはいけない。

クスコに来て現地ガイドは若い女性のペルー人に替わった。彼女は日本語がペラペラ、聞けば中学生まで日本で暮らしていたという。

直射日光がきついのでティアドロップのサングラスをつけた彼女は、小柄でキュートながらマイケル・ジャクソンにどことなく似ている。

■インカの建築技術

サントドミンゴ教会にやって来る。ここでガイドが詳しく教えてくれる。



この場所にはインカ帝国の太陽神殿があった。征服者のスペイン人がこの太陽神殿に入った時は夢のような黄金の世界が広がっていたという。それらの黄金は今我々が想像できる量を遥かに超えるもので、その黄金を全て持ち去り、神殿を破壊してスペイン建築でこの教会を建てた。そのためかスペインのアルハンブラ宮殿にどことなく似ている。

インカの建築技術は非常に高度かつ緻密で、カミソリの刃一枚も入らない石組みと言われ、隙間が全くない石の削り方や組み方が特徴になっている。

チチカカ湖のティワナク遺跡はインカ帝国より古いが同様な石組みがあり、そこから技術が伝わってきたという。またイースター島にも同様な石組みがあり、明らかにインカ帝国からイースター島に技術が伝わったという。南米一帯を巻き込んだ技術の伝承が行われていた。

スペイン人は黄金だけに目がくらんで、建築技術に目を向けなかった。

それともインカの建築技術の素晴らしさは分かったが、征服者としてのプライドから技術を学ぼうとせずに自分たちの技術を押し付けたのかもしれない。

その結果、インカ建築の神殿を破壊しインカの石組みの一部を残して大部分をスペイン流の目張りをする石組みで教会を建てた。ところがこの地域はスペインに比べて地震が多く、幾度も大地震によって教会は大きな被害を受けた。しかしインカの石組みは何の被害もなく崩れずに残っている。現存するこの教会のスペイン建築部分は修復を繰り返している。

この教会に残っている石組みの表面は綺麗に磨かれており、整然と組み立てられているので強度以外に見た目も素晴らしい。太陽神殿はインカ帝国にとっては最重要施設なので当時のインカの最高の技術で建てられた。

その技術の3つの要素を、残っている石組みでガイドが説明してくれる。

①窓が台形になっている。単なる四角形よりも斜め部分が入ると強度が増す。日本では柱と柱の間に斜めに補強材を入れる筋交い（すじかい）があるが、発想的には似ている。

②傾斜をつけて石組みで外壁を建てる。外壁は建物の内側に向かって傾斜しており、四角すいの上部を切ったような台形の建物になる。壁が支え合うので横からの衝撃に強い。

③石材を繋ぐ方法で石材の一方に突起、もう一方に穴を設けている。日本でいう“ほぞ”を切っているのだが、木ではなく石で行っており強度は各段にアップする。



この石組みの壁にはスペイン人との攻防の痕だろうか、弾痕が残っている。インカ帝国には銃はなかったからスペイン人の放った銃弾だ。（写真の右上の赤丸部分）

■街にも石組み

街を歩くと至るところにスペイン建築の中にインカの石組みが残っている。

同じインカ時代でも少しずつ進化しており、先ほどの太陽神殿は最終形でそれ以前は外観が凸凹した石組みが多い。それでもカミソリの刃一枚というこだわりは貫いている。

12角の石というものに案内される。石組みは4角形だけかと思っていたが、12角の石でも隙間なく詰まっているのがこの名所のミソらしい。これは意図的なのか偶然なのか分からないが、ガイドはもちろんインカの技術だと誇らしげに説明している。



(12 角の石と現地ガイド)

■ フォルクローレ

昼食のために案内されたレストランでフォルクローレを聴く。フォルクローレはスペインとインカの融合によって生まれた音楽だ。

シンプルな 2 人構成のセッションで、一人がギター、もう一人は笛とパーカッション。それはスペインとインカの楽器の協演になっている。ギターはもちろんスペインからきた楽器で、笛はアンデス生まれでケーナやサンポーニャが有名だ。パーカッションは世界共通の打楽器だから、この組み合わせは面白い。

曲も 1 拍子、2 拍子のリズムでドレミソラの 5 音音階のアンデスの旋律、6/8 拍子のリズムを基本とするスペインの旋律の両方が取り入れられている。

そして名曲「コンドルは飛んでいく」を演奏してくれる。この曲を聴いているとコンドルが悠然と翼を広げて飛んでいる姿が目に浮かんでくる。

そういえばナスカの地上絵にもコンドルがあった。コンドルは南米では存在感ある鳥で南米各国の国鳥にもなっている。その生態は人間に似ている。繁殖年齢が高く、出生率が低く生涯を同じ伴侶と過ごす。そのため少子化が進み絶滅危惧種になっている。

ゴルフで、規定打数で上がるのはパー、それより 1 打少なくあがるのをバーディ、2 打少ないのをイーグル、3 打少ないのをアルバトロスという。ゴルフをする人ならそこまでは知っているが、その次の 4 打少ないのを知っている人はほとんどいない。それをコンドルという。今まで全世界で 3~4 回しか達成されておらず、幻と言ってもいい。おっと話がそれたか。

■ クスコ市街地

クスコは街全体が世界遺産に登録されている。インカ帝国の見事な石組みの上に広がるスペイン建築が作りだす独特の美しい街並みが評価されたというが、侵略と破壊という歴史的事実の上で文化の融合だと言われても盗人猛々しいという感じがする。

クスコの市街地の中心はアルマス広場の周辺だ。

アルマス広場 (?)、確かリマにもアルマス広場があった。アルマス (armas) とはスペイン語で武器という意味で、スペイン人は征服者の象徴として武器をかかげてペルーの至るところにアルマス広場を造った。

クスコのアルマス広場周辺にもスペイン建築のカテドラルや教会がある。これらの建物もインカの神殿や皇帝の宮殿を壊して建てられた。まさしくやりたい放題だ。



この頃のスペインは国力も文化も絶頂期で、地震には弱いかもしれないが古き良き一級品のスペイン建築がクスコには残っている。

スペイン本国はガウディなど新しい建築家によって進化して今ではサグラダ・ファミリアがスペインの代表建築になっている。

え、この現象はどこかで聞いたことがある。そう日本からペルーに移民した人々が未だに古い方言を使っているのと同じだ。絶頂期のスペインを見たければ、クスコに来ることか。

南米最大のインカ帝国と世界を支配したスペインの文化が融合したクスコは実に面白い。兼高かおるは本当に素晴らしい街を私に紹介してくれた。

■インカ帝国の興亡

インカ帝国の歴史は非常に興味深い。高度な文明で多くの人々を従えた大帝国なのに簡単に侵略され滅ぼされた。

インカ帝国はクスコ王国を基に 1438 年に成立し、中央政府と 4 つの属州とから成る連邦制を採用し属州とは共存共栄の関係だった。アンデス一帯に広大な領地を有し、80 の民族で人口 1600 万人を擁した。スペインに滅ぼされる 1533 年まで約 100 年間繁栄した。

インカ帝国とはアンデス一帯に点在していた色々な文明の集大成とっていいだろう。

この文明の最大の欠点は文字がないことで、遺跡以外は後世に何も残していない。そして鉄や車輪もない。武器は石器、こん棒、投石というものだった。馬もいなかったのも、荷役としてリャマやアルパカが使用されたが、人が動物に乗るという発想は無かった。しかし道路は当時のヨーロッパより整備されていた。

スペイン人フランシスコ・ピサロの一行が到来する少し前、インカ帝国に天然痘が急速に伝染し、人口は 4 割～1 割になった。天然痘はどうもヨーロッパ人が持ち込み、北部の属州から入って来たらしい。この頃はコロンブスのアメリカ到達から数十年経過している。

さらに悪いことに皇帝が死去し内乱に陥った。内乱の結果アタワルパがインカ帝国最後の皇帝になった。インカ帝国は天然痘と内乱でかなり弱体化していた。

1532 年ピサロ一行はアタワルパとの会見に臨んだ。場所は首都クスコではない。

弱体化していたとしても普通に考えればピサロ一行には勝ち目はない。ピサロ一行はみな兵士で猛者だが何しろ 168 名しかいない。アタワルパ側の兵力、いや戦争を想定していないので兵力ではないが、それでもお付きの者などが 8 万人もいた。

ピサロはスペインへの服従とキリスト教への改宗を要求する投降勧告状を読み上げてそれをアタワルパに渡した。アタワルパは意味を解せず投げ捨てた。それを合図に周囲に隠れていたピサロの部下の歩兵や騎兵たちによる怒濤の攻撃が始まりアタワルパは捕らわれた。

この 168 人対 8 万人の奇襲作戦についてはピサロ一行が克明に記録を残している。あわせて勝利の原因も記録から推定されており、それは銃、馬、情報の 3 つだ。

インカ人はこの時初めて銃を知ったので、その衝撃や混乱は想像できる。馬も初めて見る動物でそれに乗って戦う兵士も初めて見るもので、その機動力やスピードはすさまじいから像とアリのような戦いになった。情報はもちろん文字による伝達なので正確で速い。それは例えば伝言ゲームと手紙とでは情報の伝わる精度も時間も大差がある。ピサロ一行はインカ帝国側の情報を握っており、だからクスコではなく野営していることも知っていた。アタワルパは口伝えに聞いた情報だけで、そもそも戦闘を全く想定していなかった。恭順の意を表す表敬訪問とでも思っていたのだろう。おそらくはそういう情報操作をしたのだろう。

この奇襲作戦でピサロ一行 168 人は全員無事だったが、インカ人は 7000 人死んだという。

捕らえられたアタワルパはピサロと釈放交渉をし、彼が幽閉されていた大部屋 1 杯分の金と 2 杯分の銀を提供した。ところがピサロはこの身代金をもらっても約束を反故し釈放しなかった。結局、翌年アタワルパは処刑された。

さらに悲惨なことにアタワルパは処刑の時に無理矢理キリスト教に改宗させられ洗礼名をフランシスコと付けられた。

これによって 1533 年インカ帝国は滅ぼされた。財宝は持ち去られ主要施設は破壊され、キリスト教への改宗と植民地化が徹底的に行われた。皮肉なことにこの時からインカの人々は文字を手に入れることになった。

しかしこれだけ屈辱的なことをされても、現在の人々がそれを受け入れる寛容性には驚かざるを得ない。この寛容性がこの国の人々の根底にある国民性なのだろう。

それは日本人では考えられないことで、ましてや日本の隣国で相変わらず過去の歴史ばかりにこだわるどこかの国とは大違いである。

それにしてもスペイン人が強奪した金銀財宝は一体どうしたのだろうか。1 日 100 艘の船で運ばれたといい、総額は現在の貨幣価値で 500 兆円、日本の GDP と同額だ。

私の最大の疑問は、この金銀財宝をスペインはどのように使ったのだろうか。あるいは本当にスペインまで運ばれたのだろうか。

まともに国のために使っていれば、その後の世界の勢力図は全く違っていただろう。

■日本は戦国時代

インカ帝国が滅亡した 1533 年は、日本は戦国時代だ。

そしてこのインカ帝国滅亡の大筋を、どうも豊臣秀吉や徳川家康は誰かから聞いて知っていたという説がある。

情報を入れたのはスペインのライバル国だろう。スペイン人は危険だと吹き込み、巧みに自国を売り込んでいたに違いない。この情報を知ったからか、交易のやり方、キリスト教への対応も変わった。事実、大きな流れはそういう方向に舵が切られた。

情報を入れた国は一体どこなのか、その後が一番得をした国、スペインのカトリック教会と対抗していたプロテスタントの国、それはあの国か。うーん、少し考え過ぎか。

日本も相当に危なかった。何しろ黄金の国ジパングと紹介されていた。

しかし日本は戦国時代だったので武力が強く、ある程度文化が発展していた。鉄砲伝来はインカ帝国滅亡の10年後だが、すぐに鉄砲の国産化をしてしまったのは日本くらいだ。これにはヨーロッパ各国は驚いたらしい。

そういう国を植民地にするには、まず国民をキリスト教に改宗させてから人心掌握して内乱を起こさせ、弱ったところを侵略するのが当時のヨーロッパ諸国の常とう手段だった。

そう考えると天草四郎が率いた島原の乱などは、単なる一揆や反乱では片付けられない。

戦国時代とは、軍事最優先で軍拡競争に明け暮れたとんでもない時代だった。しかしそのために日本は救われ、平和に治めていたインカ帝国は滅ぼされるという皮肉な結果になった。

戦争を肯定する気は全くないが、歴史から見ると必要悪なのかもしれない。

第五章 マチュピチュ (Machu Picchu)

■ マチュピチュ村

マチュピチュへはバスと列車を乗り継いで行く。クスコから北西に直線で約75kmなので、日本に置き換えると東京からの方角も距離も埼玉県の秩父が思い浮かぶ。

その例えに異を唱えらるれば標高で、マチュピチュは標高2400mにあるがクスコよりも低い。一般的には遺跡などは高い山の方にあるものだが、逆になっているのが面白い。

マチュピチュ観光の拠点は大マチュピチュ村で、村に行く交通手段は一本の線路のみで、列車に乗るためにオリヤンタイタンボ駅は世界中から観光客が集まっている。

列車は松・竹・梅と3等級あり、私たちは“竹”の展望車に乗り込む。



展望車は上の空間だけでなく横幅も広い。しかし線路の幅は日本の JR 在来線の軌道よりも狭い。これではカーブを曲がるのが危険でスピードは出せない。それで列車はカーブで相当ゆっくり走る。対面席なのでツアー仲間と会話ははずみ、のんびりと列車の旅を楽しむ。

夜 9 時、列車はマチュピチュ駅に着く。客を待つプラカードを持った地元の人と乗客でごった返している。その雑踏を抜けると繁華街があり土産物屋、ホテル、バー、レストランなどが建ち並ぶ。煌々と店の明かりが点いており、人通りも多い。

私たちの泊まるホテルは最高級だとガイドが自信を持ってホテルに案内してくれる。確かに高級で、木を使った造りが特徴的で館内はまだ新しい。

相当に金をかけている。それでも儲かるのだから、遺跡は“打ち出の小槌”になっている。

■感動の対面

翌朝、ホテルのロビーに集まったツアー客の面々は重装備だ。寒さ対策、暑さ対策、雨対策、日焼け対策、虫対策と大変なことになっている。

山の天気は予測困難で、天気予報を見ても予報機関によってまちまちだ。そこで昨夜ガイドに個人的な“天気予想”を聞いたが「曇り時々晴または雨」と言っていた。要は分からないらしい。本日また予想を聞くと「晴れと曇り、夕方から雨」と好転している。

バスに乗り込み、綴れ織りの急斜面を登る。駐車場に到着し、いよいよ遺跡に入る。

木々に覆われた山道を歩き始めるが、標高 2400m で空気が薄いのでガイドはゆっくりと歩いてくれる。しかし私たちは昨日クスコで高地トレーニング？をしているのでこの程度ではあまり苦にならない。このツアーの行程は上手くできている。

マチュピチュ遺跡が徐々に私たちの視界に入って来る。

広い場所に出るとリャマが迎えてくれる。ガイドが言うにはリャマは遺跡の草刈り担当で、伸びた草を食べてくれるという。そのため飼育小屋もあり全てのリャマには名前がついており、ガイドは「この子は〇〇ちゃん何才」とか教えてくれるが、私は啞然とするばかりだ。



リヤマの出迎えからさらに上に登ると遺跡が一望できるビューポイントがあり、雑誌やカタログで紹介される写真と同じあの光景が見えてくる。

感動の対面になる。

観光客たちは皆一斉に「ウォー！」と歓声をあげる。写真で見ていたあのマチュピチュ遺跡が目の前に広がっている。

これは本当に素晴らしい。何と表現していいか分からないほど感動が込み上げてくる。

「この写真と一緒にでしょ！」と同行の坂田さんが興奮気味に私に写真を見せながら話し掛けてくる。「確かにここだ！ここですね！」私も写真を覗きながら興奮して答える。



(遺跡内部を拡大)



先ほどまで雲に隠れていた遺跡の背後の尖った山、ワイナピチュ山もその姿を見せている。今、私の眼下にあるマチュピチュ遺跡は、私が今まで見てきた他の遺跡とは明らかに一線を画している。緑の芝生が生き生きとして、人々が生活しているようにさえ感じられる。壁が残っているので簡単な屋根をつければ今でも人々が暮らすことができそうで、パンアメリカン・ハイウェイで見た3匹の子豚の家の住人たちならば勝手に住むかもしれない。何と表現していいのか迷っていると私の脳裏に浮かんだ言葉は“空中都市”だ。

■空中都市

感動を残したままビューポイントから降りていくと空中都市の城壁がある。城壁には入口があって、そこから空中都市の市街地に入る。入口の壁には簡単な扉かカーテンのようなものを掛けた穴が残っている。

市街地の様子が詳しく分かる。水路が張り巡らされて16の水汲み場がある。広場がありその奥に主神殿がある。その他に王女の宮殿、コンドルの神殿などがある。

コンドルの神殿といっても文字のない文明なので、現代人が付けた名前だろう。コンドルが翼を広げている様子を表しているという大きな石がある。自然石だろうが、その石の周囲には人為的な石積みがありクチバシのような置き石もある。見ようによってはコンドルに見えないこともない。



(コンドルの神殿 1枚に収まらず2枚を合成)

面白い話をガイドから聞く。マチュピチュは人々が生活するための都市ではなく、王族の離宮的な意味合いで造られたという。そのために宮殿や神殿の周囲に王族の生活を支えるお付きの者の部屋があり、王族と近い距離で寝食を共にしていた。その関係は権力と服従ではなく協調関係だったという。

インカ帝国には身分制度も奴隷制度もなかった。それは属州との関係も同じだとガイドは強調する。皆で助け合って仲良く暮らすというのがインカ帝国のスタイルなのだろう。

離宮なのでこの都市の収容人数は数百人で、王族不在時はもっと少人数になった。

市街地から先ほど興奮したビューポイントの方を見ると段々畑が広がっている。50段くらいある見事な段々畑のスケールは、高さも広さも角度も私が思っていたレベルを超えている。よく高い急な斜面にこの段々畑を作ったと感心してしまう。



■空中都市の謎

それにしてもなぜこんな山の上に都市を造ったのだろうか。離宮といっても単に避暑や避寒ではないらしいが、この場所の選定理由がどうも良く分からない。

ガイドに聞くと、その理由は神である太陽に少しでも近づくためだというのが、それならクスコより標高の高い場所にすればいい。私はその説には賛同できないが、とにかく宗教が関係しているのは確かだろう。

空中都市の内部を歩いていると、太陽の神殿という塔をガイドが教えてくれる。窓が2つ開いていて一つの窓は夏至の日に、もう一つの窓は冬至の日に、日の出の光が窓から差し込み同じ一点を照らすという。

それを見て私はこれだと思った。

海の上ならばそんなポイントは無限だが、山岳地帯で山の上にあって特定の山から特定の日に光が合致する場所は珍しい。最初にそのポイントを見つけて、そこに神殿と都市を造ったのだろう。インカの暦は太陽暦なので夏至と冬至は重要で、それを正確に割り出した。

太陽信仰のインカ人にとっては神と対話する場所になる。それは作物の植え付け時期などを測っていたのかもしれない。そういえばジャガイモは年2回栽培できる。



(太陽の神殿)

考古学とは少ない事実を基に、多くの部分を想像する学問だと私は思っている。

私は遺跡を訪れると、どこまでが事実かを線引きをする。あとは想像力を発揮させて遺跡の謎に挑む。それはゲーム感覚で自分なりに納得いく想像ができた時にゲームのステージをクリアした格好になる。もちろん正解かどうかは分からない。だからこそ面白い。このゲームは遺跡見物を何十倍も楽しませてくれる。

従って謎が解き明かされている遺跡は想像する部分が少ないのであまり面白くない。その点、南米の遺跡は謎だらけで、古代人からクイズを出されているかのようだ。

このクイズ形式の謎解きで遺跡を見るのは、あるテレビ番組に似ている。

そう「世界ふしぎ発見」だ。あの長寿番組の秘密はここにあった。おっと、話がそれたか。

空中都市ができた理由は想像できたが、滅んだ理由は全く分からない。

インカ帝国最後の皇帝アタワルパがスペイン人に処刑された情報はここにも届けられたことは容易に想像できる。幸いにも険しい山の上にあるのでスペイン人に発見されずに済んだ。そして住民は皇帝の後を追う殉死を選んだか、喪に伏してひっそり暮らしたか、それとも逃亡したか、とにかく都市は閉ざされた。

そして1911年に発見された時は草に埋もれた廃墟だった。そこから発掘された骨はほとんどが女と子供だけだった。では男たちはどうしたのか、仇討ちにクスコに行ったのか。

またまたクイズが出題された。

■沈む空中都市

夏至と冬至で同じ一点を照らしていたはずが、徐々にずれているとガイドが言う。それはまぎれもなく空中都市が沈んでいる証で、何と1年間に1cm沈んでいるという。

理由は観光客らしい。1日に3000~5000人という観光客が365日押し寄せてくる。ざっと計算すると年間150万人も観光客がやってくる。それだけの人数の体重が原因だという。

そのために徐々に入場制限されている。ガイドは先月と今月とで入場制限区域が増えており、いずれはこの空中都市に立ち入ることも出来なくなる可能性もあると切実に言っている。

ガイドの説明では、世界遺産に登録されると不可抗力の自然劣化以外、つまり人為的でコントロール可能な劣化についてはその国や地域の責任で対処しないとイケない。

そのため入場料は47ドルと高い。しかも午前と午後は別料金だから結構な収入になる。しかし遺跡の沈下はこの程度では焼け石に水か。インカの財宝があれば話は別だが…。

■ワイナピチュ山

ワイナピチュ山に登る登山口がある。ワイナピチュ山は空中都市の背後にそびえている尖った山で、標高2700mの頂上付近には段々畑と遺跡がある。あんな急斜面の山に石を運び積む作業は大変だが、それが500年以上経過しても崩落せずに残っていることがまた凄い。



この山は1日の入山制限が400人で、非常に人気があるので世界中から予約が殺到しており、チケット入手だけでも困難だという。もちろん別途費用もかかる。

そして登ったら13時までに戻らないとイケない。遅れた場合は捜索隊が組織され、見つからなければ翌日ヘリコプターの捜索も加わり多額の費用がかかる。

過去に捜索に至った一番多かった国民はイタリア人で、続いてアルゼンチン人、フランス人だとガイドは言っている。

「どの国もサッカーが強くて明るい国民性だね」と私が言うと、ガイドは私を諭すように「脳天気な国民ですね」と返ってきた。これがペルー人の感覚か、と思いつつも私も納得してしまう。特にイタリア人はやっぱりという気がする。

■世界複合遺産

リマはスペイン人が造った街、クスコはスペインとインカが融合した街、どちらも世界遺産の文化遺産に登録されている。しかし、マチュピチュは文化遺産と自然遺産の両方の複合遺産として登録されている。複合遺産は希少で、その価値は特別だと私は思う。

2019年時点で世界遺産登録数は1121件、そのうち文化遺産は869件、自然遺産は213件で、複合遺産は39件しかない。残念ながら日本には複合遺産はない。

マチュピチュの複合遺産登録の理由を調べたが、山岳地域の芸術的価値を賛美した当たり前のことが書かれていて面白くない。この遺跡はスペイン人から逃れたインカ文明唯一の生き残りで、しかも当時の姿がタイムカプセルに入って出てきた絶品だ。

そこで私はインカ人の気持ちになってこの空中都市の価値を考えてみることにした。

インカ文明の本質は“共存共栄”だと私は思う。

スペインをはじめヨーロッパ文明は他民族への侵略の歴史だが、インカ帝国はアンデス各地の文明をまとめあげた国家なので侵略とはちょっと違う。例えば石組みの技術を教え合うなど、民族を超えて共に栄えるのがインカ文明のスタイルになっている。

自然に対してもヨーロッパ文明は自然を破壊し、いや破壊は言い過ぎだが、自然を克服していった。インカ文明は自然を克服するのではなく自然の恵みを大切にした。そのために山の上に太陽の神殿を造り空中都市を建設した。作物の収穫、自然災害の回避などを神にお願いした。お願いというよりも高度な天文学、地質学などを駆使して自然つまり神と対話することによって自然との共存が許された。そして 500 年という歳月を経て完全に一体化している。だから複合遺産なのだろう。

■ レストランにて

昼食は入場ゲートを出たところにあるレストランに案内される。遺跡近くでは唯一のレストランで、入口には一人 40 ドルと書かれている。フォルクローレの生演奏もしており、料理も雰囲気も申し分ない。そのため日本人のツアー客が多い。

隣のテーブルに座った日本人のおばさんと話をすると、驚いたことに日本から 4 泊 6 日の弾丸ツアーで明日帰国するという。それも 4 回目のマチュピチュだということからさらに驚く。そんなに好きならば 1 ヶ月間くらい長期滞在したらどうかと言いたいくらいだ。

いや、ひょっとしたら春夏秋冬に分けて来ているのかもしれない。

この地域に四季があるとは思えないが、雨季と乾季は明白だ。今は雨季なので私たちも体験した霧に浮かぶ空中都市が見られる。乾季はからっと晴れているから周囲の山々も含めた全景が良く見えるはずだ。

面白いことに気温は一年中ほとんど変わらず最高気温 20°C、最低気温 5°C という。

なぜ気温が変わらないのか、変わらないとどんな効果があるのか。またクイズを出されている。この謎解きにおばさんは 4 回も来ているのかもしれない。

■ 若い登山者

午後の部も入場し、空中都市から離れた高いところにある太陽の門を目指す。道は整備されており何頭ものリヤマが迎えてくれる。

途中で子連れ外国人カップルと出会う。あまりに小さい赤ちゃんを連れていたので年齢を聞くと先週 1 才になったという。もちろん本人の意向でなく親の旅行欲で連れられてきた。

そういえばかつて私も子供たちを 1 才の頃から連れ回していた。

年齢に応じて交通機関を選ぶと費用がかからない。2 才未満は飛行機の国際便が無料、3 才未満は国内便が無料、7 才未満は鉄道が無料なので最大限その恩恵に与っていた。写真や映像は残っているが子供たちに聞くと何も覚えていない。やはりタダはタダか。

この若い登山者もきっと覚えていないだろうが、マチュピチュ登山とは恐れ入ってしまう。

幸運にもガイドの天気予想が当たり、私たちが遺跡を降りてホテルに入る時に雨が降り始めた。実に運の良いマチュピチュ観光になった。

■マチュピチュ温泉

今朝は雨が降っている。ホテルの前には遺跡に向かうカッパ姿の旅行者が大勢いる。

その人たちを見ながら、昨日のうちに遺跡に登って良かったと私は妻と話しながらホテルのレストランで朝食をとっている。

本日の予定は午後 3 時の列車の出発まで自由時間になっており、おそらく予備日という意味合いだろう。天候によってはあの絶景は見えないから、この日程はよく考えられている。

マチュピチュ村に温泉があるというので、自由時間を使って行くことにした。ホテルから 10 分程歩くと日本にもよくある溪流沿いの秘湯の風景になる。

溪谷の最も奥にコンクリートに囲まれた一風変わったリゾートっぽい露天温泉施設があり、小さなプールのような浴槽が 6 つある。

入場料は 1 人 S/20、日本円で約 700 円だから日本の日帰り温泉並みだ。

入浴の仕方を受付のおじさんに教えてもらう。現地語で何を言っているかさっぱり分からないが、慣れたもので身振り手振りだけで十分に理解できた。

混浴で水着に着替えての入浴になる。10 人程の先客は各浴槽に散らばって入っている。

湯はやや緑色に濁っている。その濁り具合と温度が浴槽毎に異なり、各浴槽には温度が書かれた看板があるが実際の温度とはたいぶ違う。おそらく自然湧出の温泉で季節や時間で湧出量や泉温が変化するからだろう。私の人間温度計によれば一番熱いところでも 38℃くらいか、熱い湯が好きな日本人にとってはかなり温めの温泉だ。



のんびりと“マチュピチュの湯”に浸かる。

こんなところで温泉に入れるとは思ってもいなかったと妻と話をしながら混浴を楽しむ。目に入る風景はアンデスの急峻な山々とその緑の木々で、施設のコンクリートの壁にはマチュピチュ遺跡の絵が描かれている。日本ならば富士山の絵になるところだろう。

とにかく温泉、それもマチュピチュだ。感激と低い泉温のため1時間の長湯になった。

■クイとアルパカ

3時まで自由時間なので昼食も自由だが、何しろ少人数なので全員がガイドお薦めの店に連れて来てもらった。日本のテレビ局も取材に来るといふなかなか洒落た店だ。

クイという動物の丸焼き料理がある。ネズミの一種で日本では天竺鼠（てんじくねずみ）という名前で知られている。実は2日程前から私たちツアー客の間でこの料理が話題になっていた。ここでしか食べられないという希少体験を重視するか、ネズミの丸焼きは生理的に受け入れられないという心理との葛藤で盛り上がっていた。

相談の結果、野口さんがクイを、私がアルパカを注文してシェアして食べることにした。

最初にクイが出てきた。クイの目が恨めしように野口さんを見上げている。さすがに野口さんは目を背ける。クイと視線を合わないよう皿を少し回してナイフを入れる。野口さんが私に取り分けてくれた。

人生初のクイの肉は硬い。脂肪がほとんどなく肉厚も薄い。良く焼いてあるので皮はパリパリになっている。味付けは照り焼きのようだ。



(左クイ、右アルパカ)

私が注文したアルパカも出てくる。アルパカは丸焼きでないのを見た目は何の肉か分からない。食感は鶏のムネ肉に似ており、脂身もなく柔らかくてうまい。これはかなりいける。

私がうまそうに食べるのを見て、添乗員も追ってアルパカを注文した。

野口さんは硬いクイの肉と格闘している。そして何とか食べきった彼の表情はノルマを果たしたという安堵感がうかがわれた。

■再び 3400m

列車に乗ると一昨日は暗かったので見えなかったが、本日はアンデスの山々と青空とのコントラストが抜群に良い。線路に沿って流れる川は雨季なので水量が豊富で濁っているが、清流ならばノルウェーのフロム鉄道から見る景色に似ている。

これは乾季に来てみたい気持ちになる。あの弾丸ツアーのおばさんの顔が浮かんでくる。

クスコに戻る途中でいかにもアンデスという風景に出会う。地元の物売り、背後には山々が連なり、その彼方には雪を頂く荒々しい双子のような山も見える。



再び標高 3400m のクスコに戻ってくる。クスコの空気は薄い、平地の 2/3 くらいだ。

妻はまた高山病らしい、頭痛に苦しんでいる。そして私も頭痛がしてきた。生まれて初めての高山病はこんな感じなのかとちょっとワクワクしているが、この頭痛は結構つらい。

夕食は、おにぎりや漬物という日本風の弁当が配られて部屋に持ち込む。日系人が多いためか日本の味わいが楽しめる。しかしながら私たちにはそれを楽しむ余裕はなく、妻はベッドで寝込んでおり、私も頭痛であまり食欲がない。

そんな時に添乗員がインスタントみそ汁の差し入れをしてくれる。ホテルのロビーの一角に紅茶を飲むためお湯のサービスがあって、温かい味噌汁を飲むことができる。妻も味噌汁と聞いて起きあがり一緒に夕食をとる。ここにきて日本食と味噌汁は本当にありがたい。

第六章 イグアス (Iguazu)

■一日中移動日

ホテルを朝 5 時に眠い目をこする私たちを乗せてバスは空港に向けて出発する。一夜明けてもまだ私の頭痛は治っていない。高山病が続いている。

クスコを飛び立って 1 時間半でリマに到着する。さすがリマは海辺の街で空気が濃い。私の頭痛はハッキリと治っている。妻も同じだ。

ブラジルのイグアス行きの国際線に乗り換える。イグアスに近づくと木の緑と川の青が多くなり湖も見えてくる。明らかに今までとは違う世界に入って来た感じがする。

イグアス空港に着きフォス・ド・イグアスの街に入る。この街がイグアスの滝観光のブラジル側の拠点で街全体が綺麗で緑も多い。季節は夏の終わりの夕方なので過ごしやすい。

リゾート地のような街並みにある高級リゾートホテルにチェックインし、ホテル内のレストランで夕食をとる。添乗員には苦い経験でもあるのだろうか、夜の外出を控えて欲しいと言う。そのため添乗員の誘いで近くの店に買い出しに全員で出掛ける。私は少人数ツアーならではのフレンドリーなこの感覚に慣れてしまい、居心地の良さが好きになっている。

店で水とビールを買う。価格は日本よりやや高い。米ドルはそのまま使える。

それにしても本日は朝 5 時から移動だけの日になった。南米の旅は移動が多い。それに加えて時差、標高差、季節の逆転、乗り物酔い、寒暖差もある。

■現地ガイド

いよいよイグアスの滝観光、本日はアルゼンチン側から滝を見るからパスポートが必要になる。そして夏の熱帯雨林を歩くので今までとは装備がだいぶ異なり、帽子、サングラス、日焼け止め、虫よけスプレー、水着、サンダル、カップ等々を持った。

国境越えは出入国合わせて 30 分程で終わった。といっても私たちはバスの中で待っているだけで、パスポートをガイドに渡すと彼が検問所に行って手続きをしてくれる。

そうそう、ブラジルに来て現地のガイドが替わった。

日系の中年男性で、見た目は日本でどこでも見かけるおじさんだ。ブラジル生まれブラジル育ちの彼は日本語をあまり話せなかったというが、猛勉強したという。イントネーションに多少違和感はあるものの、会話するには全く問題ない。

今回の旅で 3 人目の現地ガイドだが、今までの 2 人も含め三者三様なところが面白い。

最初の彼は 30 年前に移り住んだ日本人、話好きの彼は日本人の目線で説明してくれた。

次の彼女は中学生まで日本で過ごしたペルー人、そのためペルー人の自負やプライドみたいなものが何かにつけて感じられた。

そして本日からの彼は日系ブラジル人、ブラジル人と日本人の両方の感覚で案内してくれると期待している。数年前に訪日しその訪問先が群馬県太田市、何と私と妻の実家の近くである。地球の裏側から群馬までやって来たと聞き、親近感が倍増する。

■悪魔の喉笛

イグアスの滝はブラジルとアルゼンチンの国境にあり、どちらも国立公園で世界自然遺産に登録されている。私たちはアルゼンチンの国立公園の入口からトロッコ列車に乗る。

世界各地からの観光客は実に多彩で人数も多い。50人乗りの車両が5両連結されていて全て満員という状態だ。公園内の景色を見ながらトロッコ列車の旅が始まる。青空の下で、木々の緑をくぐり抜けていく風がとても気持ち良い。

トロッコ列車を終点で降り今度は遊歩道を歩く。遊歩道は大部分が橋になっており、滝の上の浅瀬の部分を「悪魔の喉笛」と呼ばれる滝に向かっている

それにしても悪魔の喉笛とは凄い名前がついている。いかにも恐ろしそうで、得体の知れない恐怖心を抱くこの名前を付けた人に私は敬意を表したい。

イグアスの滝は大小 275本の滝からなる滝の集合体で、悪魔の喉笛はその中でも最大の滝で高さ 82m、幅 150mのU字型をしている。U字の部分の長さは 700mもある。

ついでにイグアスという名前は先住民の言葉で“大きい水”という意味だが、普通に大きいのではなく感嘆の意味もあるというので“スゲー大きい水”というものだろう。

歩くこと約 30分、その悪魔の喉笛の水しぶきが見えてくる。

「水しぶきが来ますから、カップを着てくださいあーい！」とガイドの声が聞こえてくる。



展望台に到着すると悪魔の喉笛を横から見ると、とにかく水しぶきが凄い。滝壺に落ちる水量豊かな水が、しぶきになって風に乗って襲ってくる。相当濡れるが天望台の撮影スポットは撮影待ちの人が多くなかなか空かない。それでも今日は空いているとガイドは言っている。

あまり待たずに私たちの順番がやってくる。

その理由は長居をするとカメラも濡れるからで、それほどに水しぶきが凄い。しかしそれでも水量が少ない方だとガイドは言っている。



私たちが撮影をテキパキと済ませ、天望台を離れる。

そして来た時とは別ルートでアルゼンチン側の滝を見ながら遊歩道を歩く。

ガイドはいつもならば滝になっている場所も水量が少ないので、岩肌が露出している部分が多いという。しかし水量が多くなると水しぶきで何も見えなくなるので全景を眺めるにはこのくらいの水量がちょうど良いとも言っている。なるほど物事は言いよう、考えようだ。

昼食は公園内のレストランになるが、牛肉を中心にしたビュッフェスタイルで肉の種類も豊富で味付けも多彩だ。昨夜の夕食も同じようだったので、どうやらこの肉三昧食べ放題がブラジルスタイルらしい。日本で行われるイベントでもブラジル料理の出店は、肉ばかりだ。

■ ボートツアー

レストランでは多くの人たちは水着に着替える。それは午後からボートツアーに行く人たちで、午前中にボートツアーをしてきた人たちは水着から着替えている。



ボート乗り場までの送迎は専用の黄色い派手なトラックで、オープントップの荷台には30人分の椅子が据え付けられている。

公園内のガタガタ道を30分ほど走る間、荷台ではスタッフがポルトガル語で笑いをとりながら説明している。いやここはアルゼンチンだからスペイン語か、どちらも分からないので笑ってごまかすことになる。

ボート乗り場で頑丈な防水袋を渡され、濡れては困る服やカメラを防水袋に入れる。そして救命胴衣を着け、その救命胴衣が確実に着いているかを係員が厳しくチェックしてくれる。

およそ 50 人を乗せてボートは出発する。

このボートが実に速い。おそらく時速 80 キロは出ているだろう。滝までかなり離れているが、このスピードなので 10 分程で滝の下まで到達する。

午前中は横から見ていた滝を今度は下から見ることになる。船上からの撮影タイムを設けてくれて乗客は皆シャッターを押しまくっている。



しかしその時間は長くはなかった。ボートの先頭に立っている船頭の助手がカップを着始める。カップは業務用らしく相当しっかりしている。

間もなく船は滝の落ちる下に入っていく。

悪魔の喉笛で浴びた水しぶきどころではない。バケツをひっくり返したような水が上から容赦なく降り注いでくる。悲鳴とも歓声ともいう大きい声が方々からあがる。私も思わず叫ぶ「ウオッー！」と、何度も叫ぶ。



これは凄い、凄すぎる。

バケツをひっくり返したのは 1 回や 2 回ではない。足元を見ると船の床は川のように水が流れている。この水が抜けるようなボートの構造になっているはずだが、今はそんな構造を探る余裕はない。

私もこれまでいろいろな水しぶきがかかるアトラクションを体験したが、それらは子供だましかった。これが本物だ、それもスゲー本物だ。

そんな本物体験を終えて無事帰還し、防水袋を開ける。あの水の中にあつて何も濡れていない。この防水袋も本物だ。

トラックに乗ると夏の日差しとオープントップの荷台に吹く風で、濡れた水着も T シャツもほぼ乾いてしまった。

■ブラジル滝

イグアスの滝 2 日目、本日はブラジル側の遊歩道を歩く。対岸にアルゼンチンの滝を見ることができる。

イグアスの滝の構造を簡単に説明すると、国境を流れるイグアス川の川床に段差ができてそこが滝になっており、段差を上からみると V 字型をしており最も奥が悪魔の喉笛、そこから両側に滝が広がっていて長い方がアルゼンチンで短い方がブラジルになる。滝全体の 8 割はアルゼンチン側にある。

昨日歩いたアルゼンチン側の遊歩道は段差の上の部分に、ブラジル側の遊歩道は段差の下の部分に作られており、ブラジル側は滝を下から臨むため迫力を感じる。個人的にはブラジル滝がおすすめである。

遊歩道をイグアスの滝の奥に向かって歩いているので、徐々に悪魔の喉笛が近づいてくる。まだ結構距離があるのに水しぶきから生じるミストが涼しさをもたらしてくれる。夏の暑さと日差しにあつてありがたい。



ガイドの話では日本映画のロケでイグアスの滝を撮っていったという。その撮影場所はここだと教えてくれた。確かに絵になるポイントだ。その映画は「世界から猫が消えたなら」で、ガイドはぜひ映画を観て欲しいと言っている。

(帰国後に映画を観た。アルゼンチン旅行の回想シーンなのになぜかブラジル滝で、監督もブラジル滝の方が気に入ったのだろう。生きることの意味を問う作品で面白い)

■贅沢な昼食

昼食はレストラン「ポルト・カノアス」に案内される。料理は今回も肉中心のビュッフェスタイルだが、このレストランの売りは料理よりも抜群のロケーションにある。

ブラジル側の滝の上流でやや高台に位置し、川の向こうに悪魔の喉笛を臨む。テラスに席をとればイグアス川の風、風向きによっては悪魔の喉笛の音やミストを感じながら食事を楽しむことができる。ガイドブックにも必ず載っている有名高級レストランだ。

日本や世界各地で絶景は多いが、それを感じながら優雅に食事できる場所はそう多くはない。モンシャンミッシェルのような人工物ならまだしも、世界自然遺産では稀だ。料理皿に肉を取らずに持って来ても、そこにある絶景が主菜になるという贅沢な昼食ができそうだ。



■ヘリコプター遊覧

今回のツアーにはイグアスの滝のヘリコプター遊覧がオプションツアーで用意されており、現地で210ドル(約23000円)を別途支払ってくれと案内があった。フライト時間はわずか10分間ということで、実は当初は躊躇していた。それで今回の南米旅行の主目的は何かと自問自答した結果、やはりマチュピチュ遺跡とイグアスの滝だ。

ナイアガラの滝の幅はアメリカ滝260mとカナダ滝670m合わせても1km程だが、イグアスの滝は4kmもある。さらにかつて元アメリカ大統領夫人がこの雄大なイグアスの滝を見て「かわいそうな私のナイアガラ」と言ったことが私の脳裏に残っていた。

そう考えるとヘリコプター遊覧は申し込むしかないという結論に至った。

何事も目的は重要だ、旅の場合も迷ったり悩んだりした時には目的を明確にすることにより問題がクリアになる。

実は私にとっても妻にとってもヘリコプターは人生初体験だ。いい機会かもしれない。



ヘリは離陸して5分程で滝の上空に到達する。悠々と流れる水量豊富なイグアス川に白い水しぶきをあげているイグアスの滝が見えてくる。

一番奥が悪魔の喉笛で、その右がアルゼンチンの滝、左がブラジルの滝だ。滝の全景はこんな形だったのかと興奮しながら覗き込む。

昨日私たちが乗った滝に突っ込むボートも見える。今もまた悲鳴と歓声をあげているのだろう。



悪魔の喉笛の水しぶきの部分だけに虹がかかっている。昨日水しぶきをあびたアルゼンチン側の展望台も見える。上空から見る悪魔の喉笛の滝壺は荒れ狂う水で底知れぬ恐ろしさを感じ、改めてそのネーミングに感心する。210ドルの価値は充分にあった。

■圧倒的迫力

アルゼンチンとブラジル、さらに水上と上空からもイグアスの滝を体験した。その圧倒的迫力は私にいろいろなことを教えてくれた。

最近では情報技術（IT）により情報が氾濫して実際にその場所に行かなくても行ったような気になってしまう。いわゆる“インスタ映え”はその最たるものだが、そうすると映像だけで満足してしまい視野が広げられずに感動の少ない人生を送ることが往々にしてある。残念ながら技術が進歩しても映像では本物体験でしか得られない感動を伝える事は難しい。人生を豊かにするのは感動だろう、それも圧倒的迫力による感動だ。

人間は自分を圧倒するものに対峙すると自分の無力さを感じる。私はイグアスの滝の圧倒的迫力に対峙し、所詮人間の営みや悩みなどは些細なことだと気が付いた。それは“悟り”ともいえるものでその境地に至ると見え方も発想も変わり名案も生まれ、気持ちもリフレッシュされて心機一転やる気も出てくる。人間には圧倒的迫力体験が時々必要なのだろう。

■3国国境

イグアス川はアルゼンチンとブラジルの国境線になっている。そのイグアス川がパラナ川とT字型で合流する点があり、パラナ川の対岸はパラグアイなので合流地点は3国の国境になる。その3国を一望できる場所に案内される。

このような場所は世界でも珍しいが、私が驚くのはそこではない。

先住民が“スゲー大きい水”と言ったイグアス川でさえパラナ川の支流で、そのパラマ川は最終的にはラプラタ川になり大西洋にそそぐ。その河口幅は270kmというから、東京から名古屋まで行ってしまう程の距離で途方もなく大きい。それでも南米大陸2番目だという。もちろん1番はアマゾン川だ。この大陸のスケールには驚くばかりである。

■ディナーショー

ブラジル最後の夜はディナーショーが用意されている。過去に私が参加したどの海外ツアーも旅の最後にホテルや食事のランクを上げるように行程が組まれてくる。

時差ボケも解消されていよいよという頃にラストナイトが訪れるというのが悲しいかな、海外パッケージ・ツアーの相場である。

今宵は1000人も入るレストランに案内される。私たちの席はステージのすぐ前の特等席が予約されている。長いテーブルに向かい合わせで座ると5人は奇数なので一つ余ってしまう。

添乗員を呼んで「一緒に座りませんか？」と声を掛ける。

彼女は嬉しそうに「いいんですか」と私の前に座った。

「こんなステージの真ん前なんか、初めてです」と言う。添乗員の席は隅の後ろの方しかあてがわれないというから、彼女も少数精鋭5人ツアーの恩恵に預かる。

食事はもはやお馴染みの肉料理主体のbuffetスタイルだが、かなり多くの種類の肉が調理されており部位毎に専任の料理人が包丁で取り分けてくれる。そういう提供方法はよく見かけるが、15人くらい料理人が並んだ光景は圧巻で、肉市場のイベントに来たようだ。

事前にガイドが「ピカニャ」がお勧めと言っていた。ピカニャとは日本ではイチボのことで、牛の尻の部分になる。尻は普通ランプだが、ピカニャはランプの先の部位で牛一頭からわずかしか取れない希少部位で、赤身の肉で柔らかくてうまい。

それにしてもブラジルに来てから肉の部位をだいぶ覚えた。それほど肉ばかりの料理でペルーとはかなり異なる。

ショーが始まり、私たちの席はステージの直ぐ前なので迫力満点で、ダンサーが足を鳴らす響きも伝わってくる。ショーの構成は南米各国の有名なダンスや歌が各国持ち回りで披露される。

アルゼンチンのステージになり、驚くべき演出がある。私の直ぐ後ろのテーブルには若い男女が少し前から座っていたが、突如テーブルクロスをとってテーブルの上に登りアルゼンチン・タンゴを踊り始める。この至近距離で本物のアルゼンチン・タンゴを見られるとは全くのサプライズだ。

おそらくこれを見越してガイドが席を予約してくれたのだろう。これも少数精鋭ツアーの特典かもしれない。

取りを飾るのはやはりブラジル、そしてサンバだ。サンバを踊る若い女性ダンサーのスタイルも笑顔も抜群にいい。サンバは打楽器しか使わないという珍しい音楽なので独特のリズムと躍動感が真骨頂で迫力満点だ。南米最後の夜を飾るにふさわしいステージになった。



第七章 エピローグ (Epilogue)

■卒業旅行

ニューヨークの JFK 空港に戻り、たまたま隣に座った若い男 4 人組と話をする機会ができた。彼らは大学生で、これから卒業旅行で南米に渡りマチュピチュとウユニ塩湖に行くという。

卒業旅行も南米の時代になってきたのかと驚きつつも、彼らの旅が個人旅行でしかも行き当たりばったりだということを知って、私は安心する。

安心した理由は、最近の若者は海外旅行には行くが欧米などの安全で綺麗なところが多く、パッケージ・ツアーを利用するのが一般的になっている。若いことから語学や IT を駆使して失敗してもいいからもっと冒険をしろよと常々願っていたが、日頃のうっぶんが晴れた気分になる。「良い体験を！」と言って別れる。

■乾杯

米国から日本に向かう飛行機は偏西風による向かい風を受けるので来る時よりも時間がかかる。今回の旅では最長の 14 時間だ。

大変だと思いつつも、なぜか私の気持ちは晴れ晴れとしている。おそらく妻も同じ気持ちだろう。遙々地球の裏側に来て、飛行機酔いや高山病、暑さや寒さもあつたが、何よりも秘められた歴史や雄大な景色を肌で感じて、達成感のようなものがある。

売店で買って来たビールで、出発ゲートの前の待合室で妻と乾杯する。乾杯は今回の私たちの南米の旅、そして兼高かおるに敬意を表してのものだ。

彼女の偉業の一つにプロペラ機による 73 時間世界一周がある。1958 年、彼女が 30 歳の時でその記録は今も破られていない。それに比べれば私たちのフライトなどは些細なもので、14 時間が長いとか言っていられない。これも圧倒的なものに対峙しての発想の転換だろう。

私たちは乾杯で盛り上がっているが、待合室は出発 10 分前だというのにガラガラ状態で待っている人数は 30 人くらいか、それも日本人ばかりだ。これも新型コロナウイルスの影響だろうが、今回私たちが日本を出発した時は南米大陸全体で感染者はいなかったが、帰国時になって 1 名確認された。

■一人居酒屋

JAL 機に乗り込む。座席は横 2 列のトイレの前の席を添乗員が気を利かせて WEB 予約してしてくれた。24 時間前に予約したことになるが、いつの間にと感心する。

来る時は前の座席がなかったので気が付かなかったが、座席の前後左右の間隔がラタム航空に比べて明らかに広い。日本の航空会社は燃料節約と居住性向上のためにシートの改良を常に行っており、その成果かもしれない。

来る時の CA が言っていた「次も乗って頂きたい」という思いが創意工夫を繰り返すのだろう。現状を受け入れない日本人だが、受け入れるとある意味進歩が止まる。受け入れないからこそ改善を繰り返す姿勢は日本人の強みだろう。

2人掛けの通路側に座った私は時々散歩を兼ねて CA のところへ行き、ビールを頼む。銘柄を聞かれて迷わずエビスと答える。そんなことを繰り返し“一人居酒屋”状態になっていることに気がつく。顔馴染みになった CA は「ごゆっくりお楽しみ下さい」と笑顔を添えて渡してくれる。遠い異国からの帰り道に、それは嬉しい対応をしてくれる。

■温泉評価委員会

私は温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉に行った時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を5段階で評価する。

マチュピチュ温泉の評価は泉質3、風呂2、立地環境5、コスパ3、サービス4、建物・部屋3、料理は該当なし、総合点（平均値）は3.33になった。風呂は無味乾燥の浴槽で深さが中途半端で中腰で入らなくてはならず低評価、サービスは受付のおじさんの巧みなジェスチャーで高評価、立地環境が5なのは理解できるだろう。成分は不明、湧出温度は39℃くらいだろう。

■今後南米に行く人のために

これまでの本文中に今後南米を旅するにあたって参考になることも織り交ぜて書いたが、書ききれない部分も多かったので本文で触れていない留意点を書いておく。

南米は地球の裏側なので冬から夏までの準備が必要だ。それなのに南米全域をカバーするラタム航空の預け荷物には制限があって、突起部含めて3辺の合計が158cmとかなり厳しい。

私のスーツケースを実測すると、それよりも2cm大きい。一般的な27インチサイズなのでラタム航空に電話して確認すると、一応決まりになっていて多少の融通は現場の判断だという当たり前の回答が返ってきた。

現場で断られた場合でも追加料金100ドルを払えば済むのだが、フライト毎に取られたのではスーツケースを買った方がましなので、中型のスーツケースを買った。

マチュピチュへ行くペルー鉄道にも荷物制限があり、3辺の合計は157cmで重さ5kgまでという厳しいものだ。

この制限ができた理由はデッキの荷物置き場に大きな荷物を置いて入口がふさがったことから規制されたというから、あまり厳密な検査はしておらず大幅に超えない限りは融通が利くようだ。実際に大きなスーツケースの一团もいたが問題なく乗っていた。

それでも万が一を考えて、私たちは軽量スポーツバッグに 2泊3日分の荷物を詰めて列車に乗り、スーツケースはクスコのホテルに預けた。

米国経由の場合、乗り継ぎでも米国運輸保安局 (TSA) の検査対象になり、TSA ロック対応のスーツケースでも鍵をかけると係官が鍵を壊す可能性があるという。そのため鍵を掛けずに、開けられてもよいパッキングで貴重品を入れないようにする。

ペルーでもブラジルでも米ドルが使えるが、偽札対策で高額紙幣は受け取らず 1 ドル、5 ドル、10 ドル紙幣が必要で、さらに汚い紙幣は受け取ってくれない。私は新札で 1 ドル紙幣 100 枚の束を持って行ったが、これは便利なので銀行窓口で相談することをお勧めしたい。

米国は乗り継ぎでも ESTA (米国電子渡航認証) が必要で、米国大使館の HP から申請した場合 14 ドルだが、代行申請のサイトに巧みに誘導されるから要注意だ。

認証結果は印刷して持参することを忘れずに、帰国時に提示を求められた。

持ち物としては、薬は通常の海外旅行に持っていく薬以外に、高山病予防薬、酔い止め、そして Dengue 熱対策のために虫よけスプレーは必要だろう。

今回私は 112 言語対応の翻訳機を持参した。ガイドと添乗員べったりの旅だったので使用機会はほとんどなかったが、英語圏以外に行く場合には持っていて損はない。

安全かつ快適に旅する心得としては、準備や対策にやり過ぎはない。

■旅の記録

実施は 2020 年 2 月 21 日 (金) ~ 3 月 2 日 (月) で、11 日間の南米の旅の全行程を示す。本文では理解しやすいように少し時間的な順番を変更した部分があり、以下が正確な行程になる。

- ・ 1 日目 14 時自宅を出て YCAT から成田空港へ、19 時 30 分成田空港発の JAL 便でニューヨークへ (約 13 時間)、現地時間の 18 時 25 分ニューヨーク着
22 時 25 分ラタム航空でリマへ (約 8 時間)
- ・ 2 日目 6 時 10 分リマ着、リマ歴史地区 (アルマス広場、カテドラル、大統領府、サン・フランシスコ教会) 観光、14 時ホテル (EL TAMBO 1) 着
18 時ホテルのレストランで夕食
- ・ 3 日目 5 時ホテル出発、バスにてパンアメリカン・ハイウェイでピスコへ (250km)
ナスカの地上絵遊覧飛行 (1 時間 40 分)、同じ道で 20 時 30 分ホテル着 (連泊)
21 時ホテルのレストランで夕食
- ・ 4 日目 6 時 45 分ホテル出発、リマ発 9:40 ラタム航空でクスコへ (1 時間 20 分)
11 時クスコ着、市内観光 (アルマス広場、カテドラル、サントドミンゴ教会)
バスにてオリヤンタイタンボ駅へ (80km)、19 時列車でマチュピチュへ
21 時マチュピチュ着、21 時 5 分ホテル (EL MAPI) 着、
21 時 10 分ホテルのレストランで夕食

- ・ 5 日目 8 時ホテル出発、バスにてマチュピチュ遺跡へ (20 分)、遺跡観光
遺跡入口のサンクチャリロッジで昼食、午後もマチュピチュ観光
18 時ホテル着 (連泊) ホテルのレストランで夕食
- ・ 6 日目 10 時ホテル発、マチュピチュ温泉入浴、昼食にクイ、アルパカ料理
14 時 55 分列車でオリヤンタイタンボ駅へ、駅からクスコへバス (80km)
20 時ホテル (MABEY) 着、夕食はおにぎり弁当
- ・ 7 日目 5 時ホテル出発、朝食はボックス、7 時ラタム航空でリマへ (1 時間 30 分)
12 時 30 分ラタム航空でイグアスへ (4 時間)
19 時 30 分ホテル (CONTINENTAL INN) 着、夕食はホテルのレストラン
- ・ 8 日目 7 時 30 分ホテル出発、バスでアルゼンチンに入国しイグアス国立公園へ
トロッコ列車、遊歩道散策、イグアスの滝の悪魔の喉笛見学、ボートツアー、
三国国境地点を見物、ブラジル再入国
18 時 30 分ホテル到着、19 時 45 分南米ダンスディナーショーへ、
22 時 50 分ホテル到着 (連泊)
- ・ 9 日目 10 時 30 分ホテル出発、ヘリコプター遊覧、
ブラジル側のイグアス国立公園内のレストラン (ポルト・カノアス) で昼食、
遊歩道散策、空港へ行く途中の土産物店に立ち寄り夕食の和食弁当を受け取る
19 時 05 分ラタム航空でサンパウロへ (2 時間)、
23 時 15 分ラタム航空でニューヨークへ (9 時間 40 分)
- ・ 10 日目 6 時 55 分 (現地時間) ニューヨーク着、11 時 5 分発 JAL 便で帰国 (14 時間)
- ・ 11 日目 15 時 25 分成田空港着、リムジンバスで YCAT へ、18 時 30 分自宅到着

総費用は 2 人で約 110 万円、1 人あたり約 55 万円になった。この中には土産やチップなど
全ての費用が含まれており以下に内訳を示す。尚、1 ドル (USD) は 110 円とした。

【国内で支払ったもの】 2 人分で 1008340 円

- ・ 旅行会社への払い込み 496880 円×2
その内訳は、基本旅費 450000 円×2
空港使用料や各種税金 25880 円×2
燃油サーチャージ 21000 円×2
- ・ 国内交通費 11500 円 (YCAT⇄成田 往復 2 人分回数券)
- ・ ESTA (米国電子渡航認証) 申請費用 14 ドル×2 (約 3080 円)

【現地で支払ったもの】 2 人分で 808 ドル (約 88880 円)

- ・ オプショナルツアー (イグアスの滝ヘリコプター遊覧) 210 ドル×2
- ・ 昼食 (マチュピチュの自由時間の 1 回、飲み物含む、2 人分) 35 ドル
- ・ 飲み物、チップ (枕銭) 等 133 ドル
- ・ 土産物代 205 ドル
- ・ マチュピチュ温泉 (2 人分) 15 ドル